

『大阪港 150 年史』と夢洲

写真は『大阪港 150 年史 — 物流そして都市の交流拠点』大阪港湾局、2021 年 7 月。

585 ページの肉厚の資料だが、たまたま大阪市立中央図書館で見つけ、すぐに目をとおした。大阪・関西万博予定地であり、大阪府市が IR カジノを誘致しようとしている夢洲に関心があるからだ。写真右は表紙に掲載された大阪港。右下に夢洲、その上が舞洲、その右が咲洲だ。

本書は第 1 部「開港からの大阪港の歴史」、第 2 部「平成以降の大阪港の発展史」からなる。

『大阪築港 100 年—海からのまちづくり』全 3 巻、1997～99 年の続編となる。大阪の歴史と大阪港の発展・変ぼうを考えるうえで参考になることが多いが、とりあえず夢洲の歴史について抜粋して途中まで紹介したい。



夢洲は大阪市内で発生する一般廃棄物、産業廃棄物、浚渫土砂、建設発生土の処分場、また、大阪港の取扱貨物の増大や船舶の大型化に対する物流機能を確保することを目的に埋め立てた人工島である。

昭和 52 年(1977)9 月に公有水面埋立免許を取得、60 年(1985)より埋立てに着手し、廃棄物等を受け入れてきた。面積は約 390 ヘクタール、4 工区に分割し、西側の 1 区は一般廃棄物および産業廃棄物、中央部の 2・3 区は建設発生土および浚渫土砂、東側の 4 区は建設発生土等を受け入れている。

4 区は竣功しており、すでに高規格コンテナターミナルとして供用している。また、1 区の一部では民間事業者による大規模太陽光発電(メガソーラー)が設置されている。3 区では埋立てが完了した区域から段階的に土地利用を開始している。

夢洲は昭和 50 年(1975)9 月の大阪港港湾計画で廃棄物処理用地(約 390 ヘクタール)に位置づけられ、54 年(1979)3 月の大阪港港湾計画の改訂で、当面、都市活動にともなって排出される各種廃棄物を処理するとともに、大阪港をとりまく将来の経済・社会情勢の変動に弾力的な土地利用計画により対応していくとした。

昭和 58 年(1983)8 月に発表された「テクノポート大阪」計画で中核ゾーンと位置づけられた夢洲では、60 年(1985)12 月の港湾計画の改訂で大型船の外貿貨物に対応した港湾施設用地と、高度技術産業の研究開発施設と関連施設用地、居住人口 6 万人の住宅地とする計画に変更した。

用途区分	面積
第一種埋立用地	25.7
第二種埋立用地	181.7
第三種埋立用地	152.5
交通施設用地	17.2
緑地	28.9
計	395.7

*続く

(2021 年 9 月 4 日)